

早乙女勝元

小説選集

2

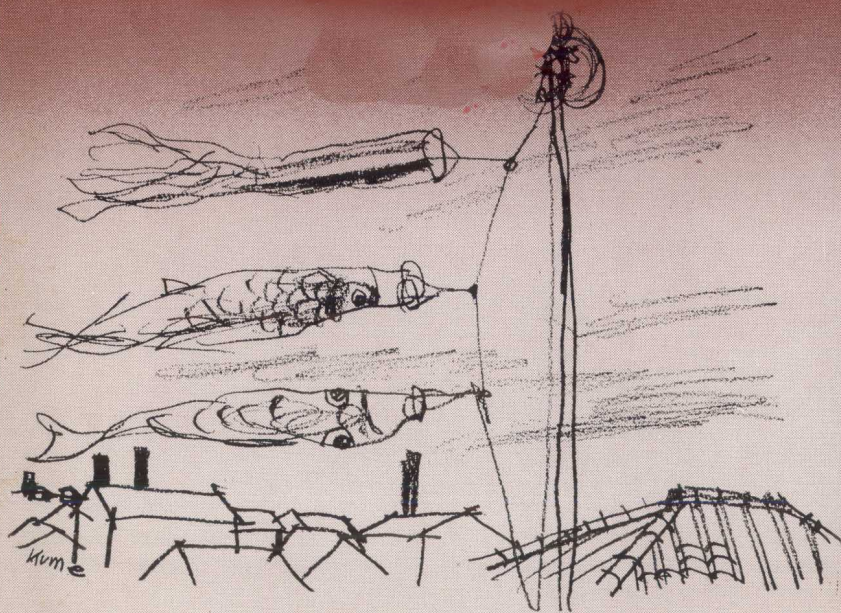
ハモニカ工場



選集

2

ハモニカ工場



早乙女勝元小説選集・2

ハモニカ工場

1967・初版

作者 早乙女勝元◎

画家 久米宏一



制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四

電話 〇三(203)五七九一

振替 東京九一九五七三六

口座 3032 0303-3032-8224

一九七九年八月第三刷

まえがき

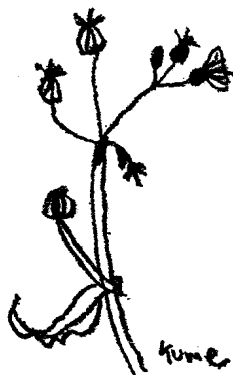
トシちゃん、お元気ですか。

もっと早く、お約束の手紙を書くはずだったのですが、ごめんなさい。こんなにおそくなってしまいました。

創作活動にいそがしかった？ とんでもない。ぼくは、そんなに有名な作家ではないんです。ほんとうのことをいえば、あれから、ずっと考えていたのです。

あれから……といっても、もう半年近くになりますね。

夏のはじめ、そうです。南風の強い日でした。ぼくが、下町のある定時制高校の読書会にまねかれたのは。——正直のところ、ぼくは人前で話をするのが、ひどくニガ手なのです。なんだか胸がドキドキして、それこそ心臓しんぞうが悪くなるんじゃないかとさえ思います。でも、ぼくはやっぱり出かけていきました。理由はかんたんです。はたらきながら学ぶ若いあなたたちに会いたかったからです。



まえがき

す。

ぼくは、そこで、自分が定時制高校にかよっていたころのことを話しました。午後五時のサイレンが鳴ると同時に工場の門をとびだして、全速力で走って、学校へかけつけるのです。当時は電気事情が悪くて、毎日停電ばかりでした。

教室ではカーバイトランプをつけて勉強です。でも、ぼくは、学校の勉強はそっちのけで、毎日、二百ページという読書計画に夢中でした。文学、哲学、経済、手あたりしだいに読破していくうちに、顔面神経マヒという奇妙な病気になったという話をしました。それでも、この乱読が、その後ぼくがものを書くようになったとき、ずいぶん大きな力になったという話もしました。

さて、三時間ばかりの読書会がおわって、学校の門を出てしばらくいったところで、ぼくは、突然うしろからよびとめられたのです。

「あのう先生、一つだけ、おたずねしてよろしいでしょうか？」

まっくらな目を輝かし、健康そうなほおをさらに赤くそめて、つきつめた視線をむけていたのが、トシちゃん、あなたでした。白いブラウスに紺のスカートのあなたは、息をはずませて、ぼくを追いかけてきたのですね。あなたは訴えます。

「……先生は、一日二百ページも読書して、たくさんさんの経験をされて、そのな

かで真実を見つけたんだと思いますが、私たち工場で仕事は追われるし、大学受験の準備もあって、とてもそんなにたくさんの本は読めません。気持ちゆとりがないから、お友達と話をしても、とりとめのないことばかり。ですから一人になると、とても孤独こどくなんです。そして、自分がこのまま青春を失っていくみたいで、すごく不安なのです。先生、そういう私たちは、一体どのような見つけていったらいいんでしょうか。真実というものを」

「真実？」

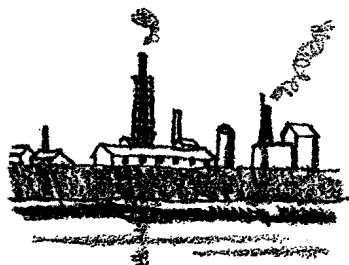
「ええ、真実の基準きじゆんといってもいいんです」

「なるほど」

ぼくは大きくうなずきましたが、残念ながら、すぐその場で、あなたを納得なつぎさせるだけの答がでませんでした。ぼくはじっくりと考えてから、手紙でかならず返事をするからと約束して、その夜はわかれたのでした。

トシちゃん。

それから半年、ぼくは、ずうっとそのことを考えていました。考えながら、一つの仕事をしたので。それが、この小説『ハモニカ工場』の改作です。『ハモニカ工場』は、二十歳のぼくがはたらきながらせいっぱいの力をこめて書いた長篇です。ここにはきつと、あなたの質問にこたえるなにかがあるに



ちがないと、ぼくはそう信じます。ぼくじしんが、真実を求めて、この小説のなかで二十代を苦しみ悩み、たたかいながら、その大勢おおぜいの若い主人公たちといっしょに生活したからです。

ぼくはいま心をこめて、この長篇を十七歳のあなたと、あなたたちの若い世代へ贈ります。

そして、さいごに一つ。真実の基準などというものは、おそらくどこにもないだろうけれど、最低これだけのことはいえるのではないか、と思います。それは、あなたのきょうから明日にむかう生活のなかで現われるどんな小さな不正も、絶対に見逃のがしてはならないということです。あなたのその目で見て、まちがったこと、納得なつとくできぬことは、たとえどんなにちっぽけなカケラでも許さぬ、トコトンまでつきつめるといふ態度こそが、やがてこの時代の根本的な歪ゆがみをとりのぞき、たった一つの真実にたどりつく道なのではないでしょうか。まちがっているでしょうか？

トシちゃん。

工場の仕事がつくて、その上夜おそくまで勉強して、きつとすぐく疲れることでしょうか、目をふせてしまわないで、そのつきつめた瞳ひとみをさらに輝かし、あなたの仲間といっしょにファイトいっばい、ドシドシと大またに歩いていこ

うではありませんか。

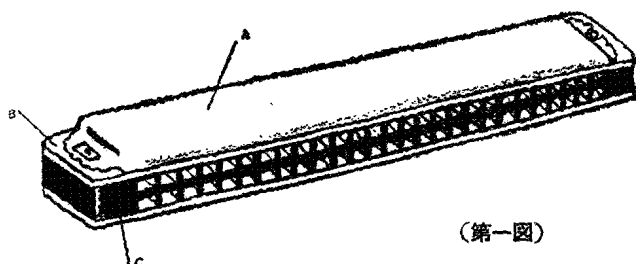
ほくも、元気でがんばります。

でも、先生というのだけはやめてください。ゾツとします。ほくも小説を勉強中の学生の一人なのですから。

お友だちのみなさんによろしく。



ハモニカ (HARMONICA) の構造



(第一図)

(A) カバー Cover (装飾板)

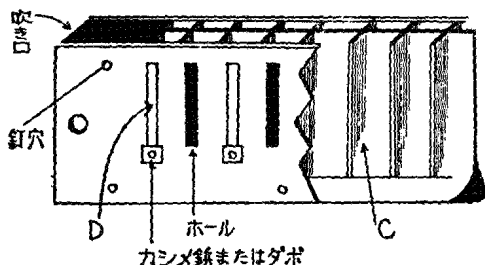
うすいきれいな金属板、真鍮にメッキをかけたもので、表面には製作所の名称とか、ハモニカの商標などのネームが刻印されている。装飾のほか、音の響鳴板の役もかねている。

(B) プレート Plate (台金・真鍮板)

カバーよりは厚い真鍮板が使用されており、21穴とか23穴とかの製品の種類によって、それだけの（吹口と仕切りと同数の）窓がうちぬかれているが、これをぞくに笛穴（ホール）とよぶ。

(C) ウッド Wood (木部)

穴数だけの溝がくし形にくりぬかれており、材質は楓を第一として、ついで、ブナ、ケヤキなどが使用されている。ウッドの上に小さな釘でプレートが定着される。



(第二図)

(C) 前記のウッドの部分で、プレートに定着されたリードが、吹き口から送られた呼吸によって振動する余地のあるだけ、それぞれの溝が正確にくりぬかれている。

(D) リード Reed (弁・震動板)

特殊配合の真鍮板で、呼吸によって振動し、発音する。吹いて鳴る音（吹音）のリードは内側に、吸って鳴る音（吸音）は外側に定着されている。低音から高音になるにしたがい、リードの長さは短くなる。このリードの上下にキズをつけることによって、音の高低が微妙に決定されるのである。

ハモニカ工場

1954年10月1日早朝より

同月31日夕方までの物語

も く じ

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
すばらしいもの	その日	嵐	ふられっぱなし	〈下の上〉の家	うたごえ	暗闇の中	一つの衝突	チヨエ	自衛隊	発火金	黒い男	善介	手紙	まえがき／1
.....														
306	288	263	246	225	206	179	155	131	105	83	62	43	29	9

てのひら自叙伝(2)

そうてい・カット

久米 宏一





1 手紙

下町。

したまちは、仕事の町であり、貧しいもののふるさとである。

そこには、ガタピシとゆがんで、いまにもよるめき倒れそうな小さな家がいくつにもおれまがつた路地に、ささりこむように密集している。倒れそうに見えてけっこう倒れないのは、満員電車のように隙間がないからだ。まっくろによんだ「おはぐろどぶ」は流れることをしらないまま、この町を自由にのたくって、荒川放水路のほうへむかってゆく。

夕方——くもって、うす暗くなりかけた路地を豆腐屋のラッパの音が通った。

ニシンを焼くにおいや、あたたかそうな味噌汁のにおいが、鼻の穴をまっくろにする煤煙とまじり、

ゆっくりと尾をひくように、ひくい軒から軒をつたわって、やがて下町の空にただよう。

隅田川をはさんだ対岸には、黒い工場の屋根のつらなりが山脈のようにつづいて、煙突が何本も空につきささっているのが見える。これらの煙突から、いつせいに黒い煙がはきだされると、朝だ。早番のリベッタの音響が、水面をはねかえってひびきはじめる。人びとがいつせいにきぜわしく町中に動きだす。そうして、眠っていた町が目をさます。くんせいのようにひからびた「オンボロ小学校」にむかって動いてゆくのは、小さな子どもたちの姿である。

ところで、この小学校の白いコンクリート塀のわきで、もうずっと前から、一台のひどく古めかしい「市内電車」がエンコしている。そのまま動きそう

にない。が、よく見ると、これは動かないのが道理だ。車がないのだから。

八時〇分！

ラウーッと、対岸の紡績工場のサイレンが、冷酷なうなりをあげた。この瞬間から、一日の活動が始されるのだ。と同時に、「うわアーン」となにかがいっせいに、この「市内電車」のなかでときの声をあげ、それはサイレンが鳴り終ってもやまず、そのままぶっ通し夜までがなりたてた。ド・レ・ミ・ファのあらゆる騒音が、なんの音階も調和もなく、ごっちゃまぜにとびだす。まるで、巨大な音のかたまりだった。

しかも、この昔の「市内電車」によく似た奇妙な建物は、片面がガラスでしきられていた。つまり内部でだれがなにをしているか、外から一目でわかるというあんばいにできている。いねむりでもしようものなら、外部からは、ちょうどテレビでも見ているようによくうつって見える。これは、わがムラタバンド製作所の心臓部、ハモニカの音をつくる作業場で、ぞくに「波動室」とよばれている。

この波動室の内部をすこし説明するのなら、まず座席は四つ、いずれも小さな木製の丸椅子だ。この丸椅子をそなえた空間は、一つ一つが一坪四方にみたない「電話ボックス」のようなせまくなるしい小部屋で、隣室はひどくぶあつい壁でしきられている。自分の音が外にもれないように、また外からの雑音が入ってこないように、防音装置がしてあるのだった。外部の雑音がきこえてこないのは、この商売にとってさいわいであるが、「オーイ」と、どなっても、すぐと目の鼻の先にもとどかぬというのは、人間様にとってはきわめて不幸である。一日中雑談一つできず、啞のように、ただハモニカの騒音ばかりをきいていなければならぬのである。

石田善介が、はじめてこの工場にきて、この「電話ボックス」にとじこめられたとき、まるでこの世界がハモニカでできているのではないかと思った。自分たちがなにを語るにしても、それはドレミファ……という、あのハモニカの音でしか語れないのではないかとさえ思った。そんなことを隣室にいる青年にいうと、

「でも、すぐなれちゃいますよ」

と、にっこり笑っている。笑うと、目がすうっとほそくなって、白い歯なみが健康そのものによく光る。まだ子どもっぽさがぬけきらないが、実にのびのびとしてさわやかな青年だと思った。

そこで善介はつづけていう。

「……ふっと思うんだ、おれの顔もやがてハモニカみたいになっていくんじゃないかなあつて。ほそくて、つるつとして、なんとなくキザで鼻もちならなくて。——だって、長いことおなじ仕事をしていると、いつのまにかそんなふうな顔になってくるから、おそろしいね。たとえば小学校の校長先生なんてのは、カドがとれてしまつて、どこの学校でも大差のない人ばかりいるし、農民は、やっぱり農民みたいだしね」

「ええ、ぼくは、いぜん機械工場にいたけど……」と、この青年はいった。

「見習工で、やっぱり一日中おなじ一つの機械にしがみついていたんです。たいした仕事じゃないけれど、目は絶対はなしちゃいけないんだ。自動送り装置を

かけて、機械が動いていくのを朝から晩まで見ている。すると、まるでロボットみたい。しまいには、なんだか自分が『自分』でないようになり、人間の世界から退化してゆくみたいな気がするんです。心細くなって、おもわずホッペタをつねってみたりする……。そんなことじゃ、どこもこれも変りないんだなあ」

などと、親しげな調子できりだした。

これが鈴木正一^{すずき しょういち}だった。善介より半年ほど前にこの工場に入つた彼は、今年二十歳^{はたち}だという。となりの部屋、つまり第一号室の『電話ボックス』にいて、ときどき波動室がゆれるような声で歌をうたっているのが、まるで遠くの山びこのように、二号室の善介の耳にきこえてくることがある。その反対がわの三号室には、頭が少々左にかしいで絶壁になっている安藤金之助^{あんどう きのすけ}がいる。スター・島崎雪子の大ファンで、あの情熱的な瞳と口もとがなんともいえないように、そのプロマイドを何枚も壁にはりつけては、口ぐせのようにそいう。

ジリジリと焦げつくような西陽が、真正面にとび

こんできて、部屋のなかの温度計の水銀がうなぎのぼりに上る真夏。入社してまだまもない善介は、製品を手にはじめて三号室へいってみた。せまい部屋の内部は、いまにも燃え上るかとも思われるほどの金之助はびったりと窓をしめきって、ビニール包みを頭の上にのせ、顔をしかめていた。そこから水がたらたらと頬にしたりおちる。なんのことかと思ったら、頭の上に氷をのせて仕事をしているのだった。しかも、毛むくじやらのゴボウのような足を、下のバケツの水につっこんで――。

「なんか、においしない？」と金之助がきく。

「におい？」

「オレのにおい」

「ああ、きみのですか」

「なかなか、フラッシュだろ？」

これにはおどろいた。

どうやら彼は、フレッッシュという単語を「フラッシュ」だと、思いこんでいるようだった。なるほどカメラのフラッシュは、ぱっと光るかぎりにおいて新鮮にはちがいない。

どんなに暑くとも、休憩時間がいはいけっして窓をあけられないのだということを、このときから善介は知った。窓をあけると音が外に散って、波動がききとりにくくなり、仕事がいにくくなるからである。しかし、ここで一日中窓をあけずに仕事をしていたら、部屋中が「自分」の空気で、いっぱいに満してしまふ。

自分においては自分にはわからないが、人の部屋のそれは、なんともいえぬカサカサとした味気ない男のにおいだった。そのことを、金之助は、「フラッシュ」という独特なことを借りていたのである。

これをきっかけにして、善介はこのフラッシュ男と話すようになった。金之助はある時はひどく茶目で、おもしろおかしいしぐさをしては女工達を笑わせたが、その半面一人でじっと石のようにだまりこんでいることが、よくあった。壁の一面所を見つめて、頬杖をつきながら、チリチリと煙草を吸いつづける彼は、はっとするくらいに淋しそうであった。そうした暗さが、彼のどういふところから出てくる

のか、善介にはおよそ見当がつかないのである。

しかし、もっとふしぎな人間が、末端の四号室にいた。もう三十に近いこの青年は、朝、電話ボックスのなかに入ると、そのまま終業のベルが鳴るまで姿をあらわさなかった。めったに便所にもいかなかったらしく、昼休みも室内で弁当を食って昼寝をして、けっして外に出ず、十二時四〇分、始業のベルが鳴ると同時に起きなおって、またハモニカをとる。すこし耳も遠いらしくて、挨拶をしてもほとんど返事をしないばかりか、笑ったこともなかった。

「あいつは、げのじょううっていうんだ」

金之助が教えてくれた。

「げのじょうう？」

「そうよ、〈下の上〉さ」

「なんですか、それは？」

と、きくと、正一が、横からそのわけを教えてくれた。

ほんとうは横田功よこたこうというのだが、小学校の時の、通信簿の平均点がいつも「下の上」しかももらえなかったのだという。気の毒なあだ名をつけたものだ

善介は笑った。しかし「下の上……」と、口のなかでつぶやいてみると、それはひどくユーモラスな余韻いんをもってひびく。おまけに親しみやすいのである。横田功氏は波動部のなかでは、この工場でもっとも古く、波動工として年をいれただけあって、さすがに手ぎわのよい仕事をやってのけた。

善介がたまにひどい品物にぶつかって頭をかかえ、それを教わりに四号室にゆくと、〈下の上〉氏は、意外に親切にいろいろと教えてくれた。

そんなところから「善さん善さん」といって、たまには、善介の部屋にも「油をうり」にくるようになる。と、めったに笑ったことのない〈下の上〉氏が、年若い正一とも、けっこう冗談をとばすようになってきた。

ところで、一日中ハモニカをふいている商売だなどという、ひどく楽しげなひびきをもつてきこえるが、じっさいはそんな生やさしいものではないのである。彼らはただ、ドレミファだけをふいている。鳴らしている。きのうも今日も、低音から順ぐりに、

レドファミラソスイド……と、あきることなくくりかえしている。それが仕事なのだ。

複音ハモニカのもつ最大の特徴、音色の柔軟さのみなもとになっている音の波動（トレモロといわれる）を、四人は、このガラスで透き通った「市内電車」のなかで、一手にさばいてゆくのである。

右手の指に、ヤスリとノミとキシヤゲ（ノミの一種）をもち、それを五本の指のように自由自在に動かす。目にもとまらぬ勢いで、音をあげさげしてゆく。ぶうーんとうなる金色の細長い弁（震動板）の動きと、音が、四人の全神経の集中していくところだ。ド・レ・ミ・ファの、一つ一つの音の基準が、すべて彼らの長い経験をつんだ「耳」だけで決定される。あのべらべらしたうすい弁の上下を、瞬間的にけずることによって、音の高低は微妙にきめられるのである。

もっともふだんは、この作業に波動台なるものをつかう。オルガンにた機械で、ばたばたと足でペダルをふみながら、一つの穴から空気を出しいれし、その上のハモニカを順次ずらして鳴らしていくのだ。

が、鳴りの悪いのにぶつかつたら、いちいち口でふいてみないことには、能率はあがらなかった。口は真鍮くさくなり、冬なぞ、氷の棒を口につきいれられたようにしびれて唇の感覚がなくなってくる。真鍮板の上のほこりで、唇が道化師のように黒くぬりつぶされてしまう。これはクレンザーでこすっても、なかなか消えない。

楽器屋の店頭の前前列をかざる「だれでも知っている日本一の名器」ムラタバンドは、夏でも冬でも、こうして一本のこらず、この「市内電車」のなかを通過してゆくのである。

さて、いま突然に三号室の窓が、がらっと音をたてて大きくひらいた。室内から、金之助の顔が、日向の猫のように目をほそくして、外にあらわれる。やがて、彼は上半身を窓にのりだした。そのひろい胸に、秋の陽がいっぱいにはねかえっている。

「おうーい！」

それで、二号室の窓が、またすっとひらく。

「なんだい、金之助氏」